

Ⅲ. 中学部

学部研究テーマ 「『わかる』を大切にした授業」

1. テーマ設定の理由

今年度の研究テーマは「一人一人の『わかる』を大切にした学習活動をめざして」である。「わかる」ということは教育的に重要な意味をもち、すべての教育活動は「わかる」により成り立っているといっても過言ではない。教師が子どものことを「わかる」、子どもが教師の伝えようとするのが「わかる」、学習や活動を通して「わかる」など、いろいろな「わかる」場面が学校生活の中で繰り広げられている。このいろいろなわかる場面や過程が内包され凝縮されているのが授業をしているときであるとも言えよう。教師は子どもにわかってもらうために教材を考え教具を工夫する。子どもはその学習に集中して取り組むうちに内容を理解し課題を克服していく。これが理想的な授業の形であるが実際はなかなかそうはいかないときが多い。教師はわかる授業をするために悩み試行錯誤を重ねて毎日奮闘している。子ども一人一人を見つめ個々に研究してはいるが、どの子どもたちもわかるような質の高い授業をするには教師全体が切磋琢磨し議論をたたかわせることによって可能となるであろう。このように、授業は子どもにとっても教師にとっても大変重要なものであり「わかる授業」について研究していくことは、子どもが授業を好きになると同時に子どもたちの有意義な学校生活を保証することにつながると考え、私たちは今年度の研究テーマとして「『わかる』を大切にした授業」を設定した。

2. 中学部で大切にしていること

中学部ではこれまで、前研究テーマである「豊かな心と生活」をめざす取り組みとして「ハッピータイム」「フリーデイ」「散歩」の3つの活動について研究・実践してきた。その中で子どもたちに対して支援していく上で大切なことを学び、この取り組みの成果を得ることができた。それについては以下の通りである。

- ・教師にとって「子どもをよく見ること」「子どもとわかり合い共感し合うこと」「教師主導から子ども主体へ」など子どもの側に立って個々の育ちを考えていくことの大切さを再認識した。
- ・子どもにとっては、自己決定・自己選択・自己開放する場が保証され、「友だちと一緒に頑張る」「自分から始める」「気持ちを開放する」ことができた。

中学部ではこのような基本姿勢や指導の方針のもとで授業を進めていくことが子どもや教師の「わかる」を促すことにつながっていくと考え、次の3点を特に重視して教育活動にあたっている。

(1) 子どもから出発する

子どもたちの実態は実にさまざまである。それぞれに個性があり人に話しかけるのを楽しむ子や逆に教師や友だちと離れ一人で遊ぶことを好む子もいる。教師は学校生活の中で子どもたちのその個性をどう生かすかにいつも腐心している。また子どもが何を望み課題は何なのか、その子のアウトラインだけでなく指導すべきことの本質をつかむことも要求されている。フリーデイでは普段見ることのできなかった子どもの姿に気づくことがある。子どもの本当の姿を発見することがある。そうした中に子どもとの接点を見つけると同時に、課題も明確になってくる。このように子どもをよく見つめよく知って「子どもから出発する」ことを基本姿勢としたい。すべては子どもから始まるのである。

(2) 子どもとともに生活づくりをする

学校生活の主役は子どもたちである。子どもたちが心底やりがいをもって学習に臨み、学校が子どもたちにとって楽しい場所、明日も行きたいなと思える場所にするために、私たちは日々取り組んでいる。教師とともに行う学習活動は子どもにとって大事な生活の一部となっており、教師と子どもが一体となって生活づくりをしていくという視点が大事である。したがって、教育課程を子どもの生活そのものと考え、授業や様々な行事も中学生としての実態や個々の個性に合わせ日々の生活づくりの一環として捉えることが必要である。子どもが1年間の見通しや自分の生活のリズムを感じ取り生き生きとした生活を送れるように支援していくこと。そうした姿勢を絶えずもち続ける教師でありたい。

(3) 子どもとのコミュニケーションを大切にす

コミュニケーションは生活面や学習面など学校生活すべての基盤となるものである。人との関係をうまくむすぶことが難しい子どもたちにとって、コミュニケーションの力を身につけることは、相手の言葉を理解したり、人とのかかわりを楽しんだりできるようになるために必要なことである。そのような力を育むためには、子どものことをよくわかっている教師がいること、そして相手とコミュニケーションをしたいと思う雰囲気が学校や教室の中にあることなど、こうした点に留意していかなければならない。授業においても「先生の言っていることがよくわかった」「先生が自分の気持ちをわかってくれた」などの実感・共感したことの体験が大切で、このことが次のコミュニケーションへとつながり、学習活動にもよい結果をもたらしてくれると考える。

3. 「わかる」教科学習をめざして

(1) 教科学習の捉え方

休み時間中の生徒の様子を見てみると、絵や文字を書いたり地図を見たりして、学習で学んだことを日々の生活の中に生かして楽しんでいる様子が見られる。こうした生徒たちには適切な指導のもとその力をより伸ばすことが望まれる。一方、生徒の中には教科学習の内容を教えるにはまだまだ難しい子どもたちも多くいて、その子その子に合わせてコミュニケーションをとりながら認知したり操作したりすることを丁寧に指導することも必要と

なっている。また、保護者からも「名前ぐらいは書けるようになってほしい」「お金を使って買い物させたい」など実生活に即した内容に関する願いが多く出だされており、このような親のニーズや子どもの学びたいという気持ちにも応えていきたい。教科は基本的な知識を獲得し生活技能を高めることを目標に子どもの「生きる力」を培う重要な役割をもっているが、このように教師の子どもに対する願いや子どもたちの実態に基づいて教科学習を考えると、その内容の範囲はきわめて広く捉える必要があると考える。

(2) 「生活の文脈」を取り入れて

教科の指導は子どもの発達の系統性や順序性や志向性などをしっかり把握して題材、内容を考えることが大切である。それは取りも直さず、「子どもから出発する」ことにほかならない。私たちは昨年度、教育課程の再編成とも絡めて国語や数学などの教科における学習内容とその指導について検討してきた。それは中学部がこれまで研究してきた「ハッピータイム」「フリーデイ」「散歩」で学んだことを教科の授業にも生かすことができないだろうか、そして教科の授業で学習されたことが「生きる力」として生活の中に反映されていくようにならないだろうかということを視点にしたものであった。今年度はこれに「わかる」ということの新たな視点が加わったことで、内容や指導法だけでなく授業のあり方そのものについて見直すきっかけとなった。教科の授業においても、子どもが主体となって活動し、自ら学ぶ力・考える力を身につけ、かつその中で生活に必要な力を獲得するようになるためにはどのような授業のあり方がよいのか。それを明らかにするのが私たちの課題である。これに関して、研究会が行われたときに助言者から次のような示唆を得ることができた。それは「子どもたちの生活の文脈を教科の授業にもち込んでみてはどうか」ということである。子どもの生活とつながりのある具体的な体験を教科の授業に取り入れることで「わかる」学習を促し子どもが活動の見通しや目的をはっきりもち生き生きと取り組むのではないだろうか。子どもの生活の文脈を教師がともに体験しながら授業を構成していく。そういう姿勢が大切であることを改めて感じた次第である。

そこで、この「生活の文脈」という言葉を本研究のキーワードとして教科学習の研究を進めていくことにした。

(3) 「生活の文脈」についての基本的考え

「生活の文脈」とは、助言者の言葉を借りれば「生活の中でなんらかの意味を持ったつながりや関連のあることがら」ということになる。教科学習において生活の文脈を取り入れるということは、子どもたちの生活の中でつながり合っている事柄や子どもたちが喜んで行っている具体的な経験を授業の中にもち込んだり再現したりして、教科の内容と意味的なつながりをもたせ指導することであると言えよう。つまり、授業において何か新しいことを学習する場合に子どもがもっている一連の体験や知識を授業場面に利用して、「わかる状況」を作り出し新しい知識を吸収しやすくする訳である。そしてその活動を子どもが次の時間もやりたいと望むものを用意することも重要である。好きな活動であればくりかえしやっても飽きないし何回か行っていくうちに学んで身につけるものがあるはずと考

える。また場合によっては文脈のすべてを取り入れるというのではなく、少しでもつながっていればよいということもある。それはその学習集団の実態によって変わってくるものだと言えよう。とにかく、「生活の文脈」を取り入れるということは授業で教え込もうというのではなく、子どもが活動する中で気づき学び、学んだことが子どもの生活に還元され応用されることで、子どもがより深く「わかる」ことにつながっていくと考える。

(4) わかる状況づくり

子どもが授業の中で学習すべき事柄がわかったり、教科における知識や技能を身につけたりできるためには、いろいろな「わかる状況作り」をしていくことが必要になる。その観点として次の5項目を挙げた。

① 生活の文脈からの題材

前項にも述べたように、子どもたちが何のために学習するかがわかるよう、子どもたちの生活の文脈に結びついた題材を選ぶことをまず考えたい。それは子どもたちが学校生活の中で体験していることでもよいし、普段子どもが好んでしている活動でもよい。生活と結びついた数学的なことや国語的なことがらは子どもたちの生活の中から見つけられるはずであるから、そうした活動の必然性を設定することによって子どもたちが活動への興味や見通しをもって授業に臨めるようにしたい。

② コミュニケーション

授業中でのコミュニケーションは子どもが学習してわかっていくために欠くことができないものである。言葉だけでなくサインや指さし、絵カードや写真あらゆるものを使って子どもの学習がスムーズに行われるよう配慮する。また本当に子どもがわかって学習をしているかどうか、教師は子どもの様子をよく見ながら授業を進める。子どもの様子や行動の結果がなぜそうなったのか、子どもがわからない場面が生じたならなぜわからなかったのか、教師は自分の指導支援のあり方コミュニケーションの仕方について十分吟味しなければならない。子どもの気持ち・心の中を敏感にキャッチすることが大切である。そして子どもとのやりとりを通して子どもとの関係を築きながら授業をしていくこと。そういう状況を絶えず保つことを心がけていかねばならない。

③ 学習形態や環境設定の工夫

教科の学習は大体は習熟度が同じ程度の子どもたちを集めて一斉授業を行う。しかし、子どもの実態は知的な面だけでなく実に様々である。そこで、子どもの性格や得意なこと苦手なことなどを考慮しながら、一人一人にあった課題を用意する。そして活動に応じて机の配置を工夫してみたり教室の中でいろいろな活動を組織し構造化することも大切である。また、できるだけ子どもの生活に沿った内容で時には教室を離れ全員で物を運んだり買い物に出かけたりするなどの活動も考えられる。このように子どもたちの実態に合わせて学習の形態をいろいろ変えてみるのもいいのではないかと思う。

④ ティームティーチング

子どもたちの興味を引きつけ活発な活動を展開するためには効果的なティームティーチングを行うことが必要である。二人で数人の生徒を指導する場合、事前に活動の内容を立

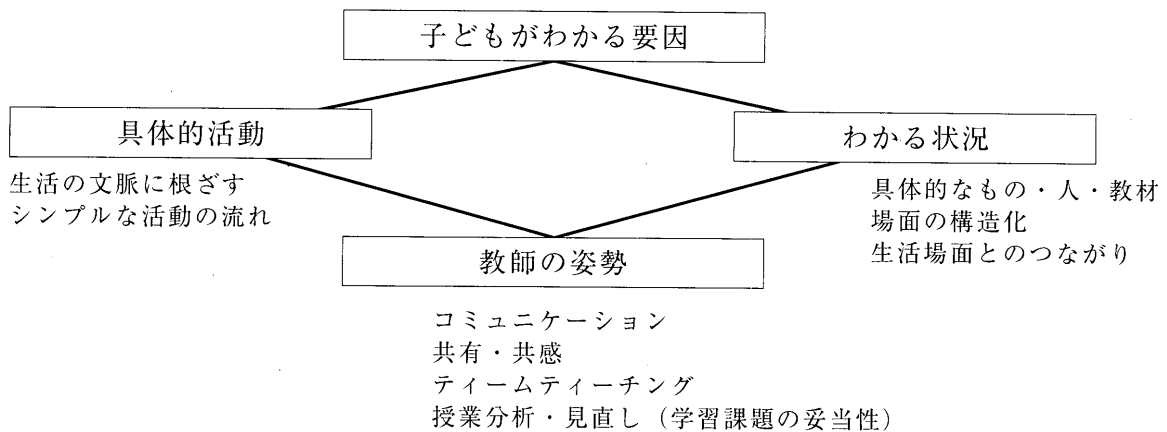
案し綿密に打ち合わせしておく。サブ指導者は生徒と同じ立場に立って授業に参加し、生徒の手本となると同時に授業を盛り上げる。つまり、チーフの指導者が授業をしやすいように子どもの言葉を引き出すような支援をしたり、子どもを学習に集中させるために適切な配慮をすることが大切である。また教材教具の提示においても、時には臨機応変に子どもに合わせて提示の仕方を変えてみたりするなど、その時その時の教師間の連携が子どもの「わかる」を引き出すポイントになる。

⑤ 教材・教具の工夫

好奇心や意欲がなければ、子どもが「わかる」「わかろう」とする機会を逸してしまうことになる。この好奇心・やる気を喚起するために、教材による動機づけは大変重要である。子どもの実態をよく捉えてそれに合わせて製作した教材教具はそれ自体子どもがよくわかって学習する最良のものとなるであろうし、また実際に本物を用意することも興味を引きつける。そのことによって子どもは何をすることがすぐにわかるのである。教材が生活の文脈の中の具体的内容と教科の抽象思考とを結びつけることに効果をもたらしてくれるなら、子どものわかる活動を一層促すにちがいない。また、教材教具の使用によってできるようになったことを繰り返し行うことで「曖昧で漠然としていたものがわかってくる」ということもありうると思う。

以下、子供と教師が「わかる授業」をつくるにあたって必要な要素をまとめてみた。

図Ⅲ-1 <子ども・教師がわかる授業づくり>



* 「子どもがわかるときの要因」には以下の事柄が挙げられる

感性が内発される	→	子どもの興味・関心
触発される	→	学習集団
体感・体験する	→	五感への働きかけ 実感的体験
見てわかる	→	教材・教師の提示やモデル友だちの様子
まねをする	→	〃
褒め合う・認め合う	→	自信・意欲
自己評価	→	納得する・比較する・承認される
既得の周辺	→	発達の最近接領域
繰り返す	→	生活の中での活用・応用

4. 研究のすすめ方

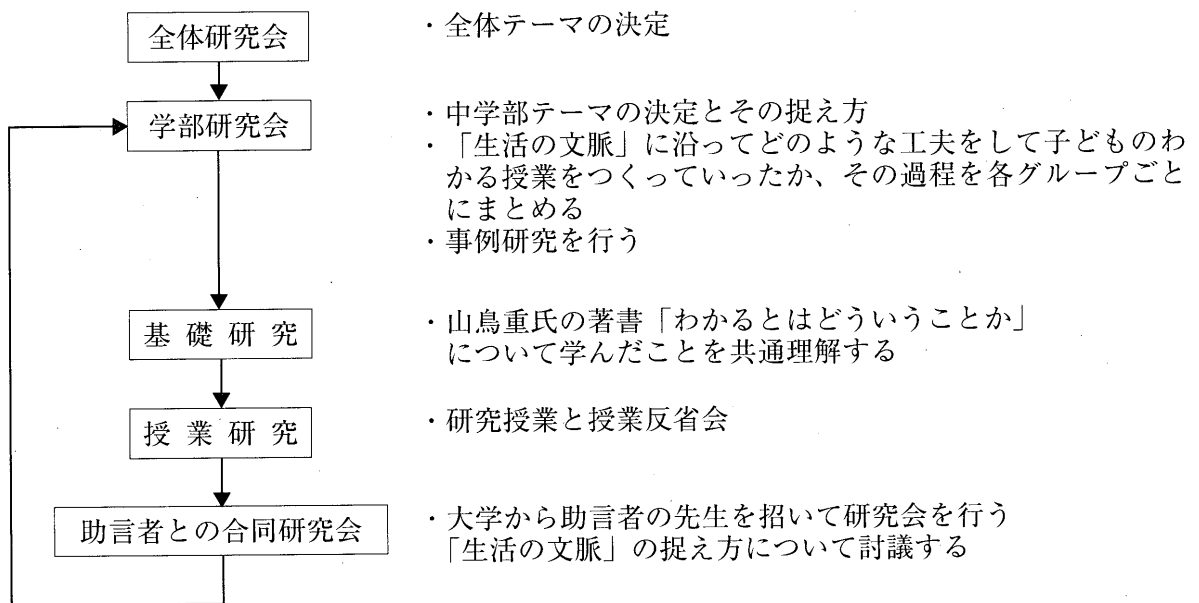
(1) 研究の方針

- ・教科の授業を進めていく場合に子どもが「わかる」過程をいかに作り上げていくか。そのアプローチのしかたを「生活の文脈」を取り入れるという方法で試みていく。
- ・子どもの学ぶ力の実態をよく理解し、それぞれの子どもの学び方を大切にしながらいかに授業を展開していったか、その工夫や教師独自の支援の仕方について事例をもとに検討する

(2) グループ学習における授業研究

本校中学部で行っている教科の授業には、国語・数学を中心としたグループ学習の授業や体育、美術、職家がある。国語・数学の学習においては特に知識の習得や概念の理解、獲得が求められるが、それらを学習しやすくするためにより一層「わかる」授業について研究していく必要がある。グループ学習には、個人差や習熟度、子供同士の相性などを考慮して4つのグループがある。どのグループも4～5人と少人数で一人一人の子どもについて分析していくことが容易であることや、教師も全員指導にあたっていることから中学部全体でグループ学習の研究に取り組むことにした。まず、それぞれのグループの授業の様子をビデオに撮り、どのような「わかる状況づくり」をし子どもがどのような取り組み方をしているかについて話し合った。また一学期、二学期には研究授業を行い他学部の先生も交えて「子どもの実態と内容の適合性」「子どもがどんなわかり方をしているか」などについて検討し合った。

(3) 研究の経過



(4) 事例研究

各グループ学習で行ってきた実践を事例としてまとめ、教科の学習においてどのように子どもにわかるような配慮をしてきたか、子どもの学びの様子はどうかなどについて考察した。その項目については次の通りである

- | |
|-------------|
| 1. 生徒の実態 |
| 2. 教材観 |
| 3. わかる状況づくり |
| 4. 指導の実際 |
| 5. 考察 |

事例は、グループ学習を担当している教師が1事例ずつまとめ、全部で6事例のせることにする。以下にそれぞれの事例を挙げる。

- | | | |
|-------|--------------------|-------|
| Aグループ | 国語「分ける活動から片づけ活動へ」 | (事例5) |
| Bグループ | 国語「自己紹介」 | (事例3) |
| | 国語「かべ新聞づくり」 | (事例4) |
| Cグループ | 数学「カレンダー」 | (事例2) |
| | 国語・数学「～さわって遊んで～」 | (事例6) |
| Dグループ | 数学「同じ長さ～木工の活動を通じて」 | (事例1) |

(河 合 利 秋)